6 音　楽　科

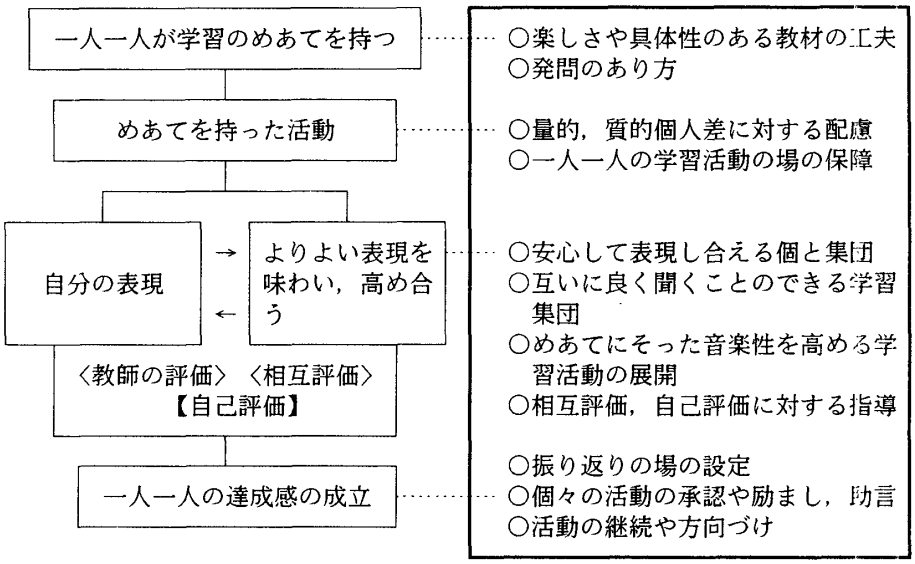
真田美智子・登　浩二

1．これまでの取り組みと「感性」のとらえ方

(1) 昨年度の研究「自己を高める評価力の育成」の取り組み

いかに児童が上手に音楽表現をしても，児童自身が学習した達成感や喜びを感じていなければ，児童自身の学習とは言えないのではないだろうか。学習は児童自身のものである。学習を通して，児童が「楽しかった。」「もっとこうしたい。」などと，達成感や喜びを持ちながら，学習を振り返り，自分自身をより高めていこうとする評価力を育てたいと考え，右のような授業構成に取り組んだ。

◎自己を高める評価力を育てる音楽科授業の構成



学習を振り返り，一人一人の達成感が成立するためには，児童のめあてが主体的，能動的であることが大切である。児童自身が心を動かされ，よさに気づき，主体的に活動することなしに，振り返って高まることはできない。

「聴いて感じた以上の音楽表現はあり得ない。」とか，「音楽は子どもが感じ取ったときに初めて存在する。」ということがよく言われる。児童自身の心で感じることが音楽学習の出発点であり，豊かに感じることが豊かな表現につながるのではないだろうか。一人一人の内面（感じ方や心の動き）に着目し，児童自身がよさを感じてめあてを持ち，主体的に学習する指導のあり方について検討していく必要性がさらに明らかになった。

(2) **音楽科における「感性」**

本校では，「感性」とは「価値あるものに気づく感覚」ととらえている。「物や事象に何を感じ表現するかということ」であり，さらに問題を追求することと考えている。この「感じ」「気づく」「表現する」ことは，けっして受け身ではなく，能動的な活動である。

音楽科においては，「いい曲だな。」「こんなふうに表現してみたい。」「○○さんの歌い方は曲の感じがよく出ているな。」などと，児童自身が，価値なるもの（音楽のよさや美しさ，互いのよさ等）に気づき，感じ，豊かに表現することと考える。

その根底にあるのは，次のような児童の捉えである。つまり，児童はだれもがいろいろなことをしてみたい。確かめたい。喜びを味わいたい，よりよく生きたいといった欲求も持っており，このような欲求が適切な動機付けなどから触発され，自分自身の感覚を磨き，思考し，判断し，もてる

力を使って精一杯表現して自らの力を伸ばしたり高めたりしようとする存在であるということである。そのような姿の児童の感性を教師がどう捉え，気づき，感じて，どのような方法で育んでいこうとしているのか，教師自身の感性が大切になってくる。それが，子どもの感性を育む支援の基盤となろう。

2．豊かな感性を育む音楽科授業

児童には，よりよいものを求めようとする価値あるものへの欲求がある。しかし，それを継続し続けて，自ら「感じ」「気づき」「表現していく」ためには，その児童の力を表出し認め，高める手だてが必要であろう。豊かな感性を育むための手だてを，次のように考えている。

(1) 内発的なめあて意識の形成

ここでいう内発的なめあて意識の形成とは，児童自身が心を動かされ，音楽のよさを感じて主体的なめあてを持つことである。内発的なめあて意識が形成されれば，児童は主体的に活動していくであろう。

よさを感じ取ることのできる教材との出会いや，活動への動機付けを行いたい。豊かに感じたり，イメージをひろげる手だても必要である。

教材や活動の価値の吟味，教材の提示の工夫，具体性のある発問等が大切である。

(2) 児童一人一人のよさを見いだす共感的な評価

一人一人のよさを見いだし，個に応じた共感的な認めや励ましができる教師でありたい。

児童の表現（音楽的な表現にとどまらず，発言やつぶやき，行動など）の中から価値を見いだし，人間としてのよさや可能性も含めた総合的な評価の視点を持ちたい。また，「楽しい感じを表しているね。」「楽しそうに歌っているね。」と児童の表現を共感的に受け止めるように努めたい。「○○することができたか。」というような結果のみの評価ではなく，表現における過程を評価していきたい。

そのためには，１単位時間の授業だけで児童を見ていくのではなく，長期にわたる継続した評価活動が必要となってくる。また，児童の実態に合わせて指導計画を修正するなど，柔軟な指導を心がけたい。

(3) 児童一人一人の感じ方や思いが生かせる場の保障

感性には，個人差があり，多様である。同じ音を聞いても，感じ方や抱くイメージは，これまでの生活経験や音楽経験，その時の気持ちや環境などによって様々な違いがあるであろう。好きな音，好きな曲，嫌いな曲等も同様であろう。その違いや共通性を大切にしたい。「私は，こんなふうに歌ってみたい。」「こんな歌い方が曲に合っていると思う。」「この音が好き。」「この音は嫌い。」などの思いや感じ方を出し合い，聞き合うことで，互いの感じ方や違い，そのよさなどを感じ取らせたい。そのためには，安心して自分を表現できる集団であることが不可欠である。「何かを言ったら笑われないだろうか。」という不安があると，思ったことや感じたことが表しにくい。互いに安心感のある暖かい集団づくりが求められる。暖かい集団づくりの視点からの音楽科授業を構成していくことが大切である。